

香港のカリキュラム改革における校本課程開発 (School-Based Curriculum Development) に関する研究 －「常識科」の教育内容を手がかりとして－

野澤 有希*

(平成28年8月25日受付；平成28年11月15日受理)

要 旨

香港は10年も経たないうちに、小中学校で児童生徒が活動的な学習を行うようになり、読解力などの一連の国際比較において、好成績を取めた。本研究ではその好成績を挙げた一因を解明することを目指した。特に校本課程開発を重視する政策と内容を考察し、「常識科」に焦点をあてて、香港の学校のカリキュラム開発の内実を明らかにすることである。

香港では常識科だけではなく、各領域であるいは領域を横断する形で校本課程開発が行われている。香港の校本課程開発の特徴として、以下の三点にまとめられる。第一に、本論文では香港の教育局のカリキュラム改革の政策の中で、校本課程開発が始まった時期と目的を解明した。校本課程とは校長がリードし、学校側が社会の変化、実生活の必要性、及び児童生徒のニーズに応じて中央課程を調整して、カリキュラム開発を行うことを明らかにした。第二に、香港教育局の校本課程開発の支援制度が校本課程開発の前進を後押ししている。また、校本課程開発を支援する行政組織と制度が整備されていることによって、校本課程開発の急速な進展を遂げた。第三に、常識科は科学、科学技術、及び個人社会と人文という三つの領域が含まれて、校本課程開発が活発に行われている。特に、探究力を育てる科学教育を重視している。常識科は香港のカリキュラム改革の目玉とも言える。

KEY WORDS

School-Based Curriculum Development 校本課程開発 General Studies subject 常識科
Hong Kong curriculum reforms 香港カリキュラム改革

1. はじめに

本研究の目的は、経済協力開発機構（OECD）のPISA（Programme for International Student Assessment）の結果において安定的で上位の成績を取めている香港のカリキュラム改革に注目し、特に校本課程開発⁽¹⁾を重視する政策と内容を考察し、「常識科」⁽²⁾に焦点をあてて、香港の学校のカリキュラム開発の内実を明らかにすることである。

香港は国際都市であり、ロンドン、ニューヨークと並ぶ世界三大金融センターとして、1997年にイギリスの植民地から中国に返還された後、「一国二制度」によって大陸とは教育制度や教育政策が異なる。香港は2000年以来、OECDのPISA調査ではほぼ三分野での三位以内にキープしている好成績を取めた⁽³⁾。この好成績を挙げた理由は、返還後の香港特別行政区政府と教育局が一連のカリキュラム政策を打ち上げたからであると考えられる。具体的に言えば、ニーズ重視のカリキュラム全体構造の改革、支援と改善アプローチの学校評価、カリキュラム評価、及び学習評価システムの整備、校本課程開発（School-Based Curriculum Development, 以下SBCDと略す）を重視する政策などが挙げられる。返還後の香港特別行政区の長官は『香港新世紀を共創する』報告書を発表し、「優質教育基金」を設立し、小中学校の質を高めるために、学校の自主性・自律性を促進し、創造性がある校本課程開発を奨励する形で教育改革を推進した⁽⁴⁾。校本課程開発を奨励する教育資金の充足だけでなく、2000年代以降、校長と教師の校本課程開発の理論と実践の専門性を高めるために、長年教育局は大学と連携し、充実している研修内容と制度を整えてきた。例えば、2009年に校本課程開発と学校改革を進めるために、教育局教育課程發展処は年間でおよそ50000あまりの小中学校と幼稚園に対して、校長と教師に約700の専門性を高める研修プログラムを準備した。研修プログラムは教科横断、学力格差の是正、小中一貫の接続性、カリキュラムリーダーシップなどが含まれる⁽⁵⁾。

筆者は、政府の支援のもとで進められた香港の小中学校の校本課程開発に注目する。日本での児童生徒の学力低下が指摘されている今日、SBCDの理論と方法はある程度蓄積されているが、効果が十分検証されたとは言えない。日本でカリキュラム開発に注目し始めたのは、1974年3月に東京で開催されたOECD国際セミナーでのSBCDの提起から

*学校教育学系

である⁽⁶⁾。現在、日本の総合的な学習の時間が縮小され、必ずしもSBCDが活発に行われているとは言えない現状においては、80年代から、校本課程改革が始まり、2000年代から本格的に中央集権のカリキュラム政策から校本課程開発を重視する教育方針に舵を切る香港のカリキュラム改革を研究する意義がある。

香港のカリキュラム改革の特徴の一つは「中央化－校本化の連動」である⁽⁷⁾。中央機関からどのぐらいカリキュラム裁量権を譲渡されているかによって、校本課程開発の活発の度合いが決められる。校本課程開発は中央課程（日本の国レベルのカリキュラムと同様）の硬直化を是正するために、学校の現状とニーズに合わせて調整していく教育活動である。むしろ、教師がカリキュラム開発の理論知と実践知を把握しているかどうか、学校文化なども校本課程の成功に影響を及ぼす。香港のカリキュラム改革の公文書として、2002年7月に『基礎教育課程ガイドライン－各尽所能・發揮所長－』（小1から中3まで）が公布され、今までの教科を統合し、八つの学習領域にまとめた⁽⁸⁾。学校が八つの学習領域あるいは領域を統合し、横断する形で自発的に児童生徒の興味関心を引き起こし、多様な学習経験を提供するために校本課程を開発している。また、校本課程は規定された中央課程と教材をそのまま教えるのではなく、知識偏重を克服する現場重視のカリキュラムである。校本課程開発とは中央課程の教育目標、教育理念と枠組み、内容に基づき、激変する社会に適応し、児童生徒のニーズに応じるように各学校が創意工夫をしてカリキュラムを創造することである。校本課程開発は中央統制と学校、教師の自主性のバランスをとって発展してきた⁽⁹⁾。本稿は、香港の学校のカリキュラムの中では、現行のカリキュラム八つの領域の中に三つの領域を統合する科目「常識科」を考察する。その理由としては、常識科は科学、科学技術、及び個人社会と人文という三つの領域が含まれて、特に科学教育、時代に合わせる未来志向のカリキュラム、価値観と態度を育てることを重視するからである。香港では常識科だけではなく、各領域あるいは領域を横断する形で校本課程開発が行われている⁽¹⁰⁾。

柴田は教育課程の基本問題として、「学校の教育活動を全体としてどのように構成するかという教育課程の全体構造に関する問題」の重要性を指摘した⁽¹¹⁾。この学校の教育課程の全体構造ないしカリキュラム編成と開発は中央課程に基づき、学校の実情、児童生徒のニーズと発達状況に合わせる活動でなければならない。このカリキュラムの全体構造が知識と経験を両方重視するための教育内容と方法を組織する設計図である。

また、香港の教育課程発展議会（中央教育審議会と同様）は『基礎教育課程指引－各尽所能・發揮所長』の中で、「各学校の教師と生徒の特色が違い、学校の教育活動の進み具合と変数が違うので、画一的な課程発展政策は通用しない」と指摘し、「各学校は活動研究、教師発展は校本課程と緊密な関係をもつ」⁽¹²⁾と述べている。つまり、香港の学校は、校本課程開発を積極的に進めつつ、その活動の中で教師のカリキュラム開発能力と授業力を高めることを図っている。このように、校本課程開発はたんに学校側と教師が「何を教えるか」という教育内容の選択、「どのように教えるか」という教育方法を意思決定するだけではなく、教師の専門性発展、教育内容と方法の革新する新しい文化を創造する意図も含まれている。教師の専門性発展を伴わない校本課程は失敗を招く恐れがあり、香港の教育課程発展議会は校本課程開発を促進するために校長と教師に対する専門性発展の研修が必要であると強調した⁽¹³⁾。

本論においては、香港の校本課程開発の政策内容を考察した後、カリキュラム開発が活発に行われている常識科の教育目標と内容を明らかにする。特に、カリキュラム全体構造の中での常識科の位置づけを考察し、校本課程開発の内実を明らかにしたい。

2. カリキュラム改革の政策と支援制度の中からみる校本課程開発

2.1 カリキュラム改革の政策から

香港教育局は本格的に校本課程開発に力を入れたのは1988年9月に「校本課程設計計画」を実施し、政府から補助金を出し、教材や新しい単元と課題を開発するなど、学校で校本課程を積極的に推進することを奨励したことから始まると考えられる。香港が校本課程開発を重視する理由としては、教師の主体性がなくなり、専門性発展に支障があるからである⁽¹⁴⁾。それゆえ、中央機関から学校へカリキュラム裁量権が委譲され、多様な校本課程開発が行われた。同時に、時代の変化につれて、学校側もより多くのカリキュラム開発の裁量権を求めようになってきた。

1999年から香港教育局が本格的に教育課程改革に着手した。校本課程開発の目的は：「1.学校の校本課程は児童生徒のニーズと興味に合わせるができる。2.教師の校本課程開発の潜在能力と専門知識の発展を促進することができる。3.校長がリードし、中央レベルのカリキュラムを学校に適合できるように調整できる。4.社会変化に応じ、実生活が必要される知識と技能を育てることができる。」⁽¹⁵⁾であった。このように、校本課程は校長がリードし、学校側が社会の変化、実生活の必要性、及び児童生徒のニーズに応じて中央課程を調整して、カリキュラム開発を行うことである。つまり、トップダウンからボトムアップ形式のカリキュラム制度へのパラダイム転換である。

表1が中央課程と校本課程をカリキュラムの内容、教育目標、カリキュラム観、教師観、児童生徒観、参加者、教材、適用範囲、弾力化、評価、説明責任の11項目に分けて、比較を行ったものである。社会の激しい変動に伴い、児童生徒、保護者、及び地域住民などのニーズも変わりつつある。どのように硬直化しがちな中央課程と校本課程のバランスをとるかということがカリキュラム研究の根本的な課題である。

表1. 中央課程と校本課程の比較⁽¹⁶⁾

	中央課程	校本課程
カリキュラム内容	国全体	個別の学校
教育目標	国、地方の教育理念に基づく	国の教育理念、学校の現状とニーズに基づく
カリキュラム観	公布した内容を変えることはできない	教師、児童生徒の実情と教育活動の過程変化と結果により、調整できる
教師観	定められたカリキュラムの実施者	カリキュラムの研究者、開発者、実施者、教師は主体的にカリキュラムを解釈し、開発する能力を持つ
児童生徒観	すべての児童生徒が習得できる	児童生徒の学力格差と能力の違いにより、常に調整する
参加者	カリキュラム専門家、学者、教師代表	学校教職員、児童生徒、保護者、校外の専門家
教材	出版社の教材	児童生徒のニーズにより、出版社の教材を取捨選択し、自作教材
適用範囲	全国	個別の学校あるいは特定の地域
弾力化	統一性が強い、授業時数が固定化	弾力化が進み、教育内容、教育方法と授業時数はニーズによって調整する
評価	結果評価	プロセス評価を重視する
説明責任	トップダウン、学校は説明責任がない	カリキュラム裁量権が大きく、説明責任を果たす

表1で示したように、校本課程は学校の現状を分析した後、児童生徒のニーズを重視して開発するカリキュラムである。そして、中央課程のように規定された内容をそのまま教えるのではなく、児童生徒の実情と発達段階、学力の習得状況により調整するカリキュラムである。教師がカリキュラムの実施者だけではなく、カリキュラムの開発者でもある。教材についても、香港教育局が出版社の教材リストを提供している。各学校が校本課程の内容によって、教材を自由に選べる。また、校本課程開発が進めているうちに、教材を使わない学校もあり、学校が独自に教材を開発する場合も多々ある。香港の学校はカリキュラムの裁量権を持つ同時に、学校自己評価、第三者評価などの評価システムの結果により、常に改善して説明責任を果たすことが求められている。

学校はカリキュラムを開発する目的は、児童生徒に多様な学習経験を提供し、自ら学び、楽しく学び、学習意欲を高める教育目標を達成するためである。現在、世界の多くの国が校本課程開発を重視する方針を取っている。教科の壁という縦割りが強い中央課程の問題点を解決するためには、学校にカリキュラム開発の裁量権を委譲することが一つの方法である。中央が教育の質を全体的にコントロールし、支援する。学校側は実情、児童生徒の発達段階の個人差、能力に応じて、興味関心を引き起こすカリキュラムを開発する。両者は相互補完の関係である。

教育課程発展議会が2001年に『学習を学ぶ－教育課程発展方向』報告書の中で、課程改革の原動力が各学校の校本課程の実践にあると強調し、児童生徒のニーズに合わせたカリキュラム開発をさらに進めた。校本課程開発を試行期（2001年－2005年）：学校は小規模から校本課程開発を試みる、改善期（2006年－2010年）：試行期の理論と経験を活かし、中央課程の枠組みに基づき、学校のさらなるカリキュラム改革と改善を図る。発展期（2011年以後）：中央課程の枠組みに基づき、児童生徒のニーズに応じて校本課程開発を行う⁽¹⁷⁾。このように、校本課程開発は三つの発展時期と計画に沿って進められている。

2. 2 教育局の支援制度から

香港の校本課程開発が活発に行われているもう一つの理由としては、教育局の支援制度も校本課程開発の前進を後押ししているからである。香港の教育局は校本課程開発を支援する行政組織と制度が整備されていることによって、校本課程開発の急速な進展を図った。例えば、1992年に教育署（2007年後は教育局）は「教育課程発展処」（現在「校本支援処」）を設立し、校本課程開発の発展に力を入れた。その後、校本課程開発の支援に当たる専門部署としての

「校本支援処」が細分化され、「小学校校本課程発展組」と「中学校校本課程発展組」が設置され、20年あまりが経った⁽¹⁸⁾。香港教育局は学校現場への専門的な校本課程の指導という形で支援を提供する制度を設けて、校外から定期的に専門家を招聘し、教育局の校本支援処の人員を派遣している⁽¹⁹⁾。

現在、「大学－学校の連携計画」により、校本課程開発の専門家の支援を受けた後、大学と学校の共同研究の形で継続的に校本課程開発に取り組む実践研究も多い。香港はすでに校本課程の実践検証段階に入ったといえる⁽²⁰⁾。

また、2001年に香港教育局は「小学校課程統籌主任」という職を小学校で設置し、その後、5年の試行期を経てから常設職に変更した。各小学校では「課程統籌主任」というカリキュラムのリーダー職を設置することによって、各学習領域で校本課程発展部会を設けて、全校の教師の参与を促すことになった。この職務は学校でカリキュラム開発を推進するために校長に協力し、学校のカリキュラムを計画し、教授と学習を改善し、評価活動を行うリーダーである⁽²¹⁾。「校本課程の開発は校長の支援が最も重要である。教師たちは校長がどのように課程統籌主任にカリキュラム改革の決心と態度をみせるかを観察する。また、どのように主任にカリキュラム開発の決定権を付与するかを見る。これは校本課程が全校に広げられるかどうかにかかわる」⁽²²⁾。

学校の全体的かつ組織的なカリキュラム開発活動は校長のリーダーシップが重要である。学校組織の中で最も改革のきっかけを与えることが容易な位置にいるのはやはり校長である⁽²³⁾。香港の先行研究の中でも、校長のカリキュラムリーダーシップの重要性が指摘された。李子健（2001）は校本課程開発の成功に必要な要素が教師の積極的な参加や外部のカリキュラム専門家の支援以外に、「校長が校本課程改革の中で積極的に改革の方向性を理解することである。同時に校長が行政面で全面的な支持をすることである」⁽²⁴⁾と指摘した。李偉成（2008）も「学校には有能な行政管理人員が必要であり、教授法とカリキュラム開発に詳しいリーダーが必要である。リーダーはカリキュラム開発、教授法の変革、および校本課程の研修活動を全体的に計画し、未来志向の有効な方策を打ち出すことが重要である」⁽²⁵⁾。また、校長が実現可能性を持つ計画を策定してから、全体の教師と会議で討論し、意見を集める必要がある⁽²⁶⁾。

教育局は校長とミドルリーダーの専門性を高めるために、具体策として、他の学校のカリキュラム開発の様子を把握する目的で、校長とミドルリーダーを他の学校の校外評価に参加させている。また、「校長支援ネットワーク」を立ち上げた。具体的には、新任校長が定年退職の校長とペアを組み、学校の行政管理の問題解決とカリキュラム開発に役立っている⁽²⁷⁾。このように、香港は「課程統籌主任」という教育課程のリーダー職を設置し、校長などのカリキュラムリーダーシップを発揮させて、専門性を高める充実した研修を通じて、校本課程開発を大いに推進したと考えられる。

3. 常識科の教育内容

次に、校本課程開発が統合された領域で行われている「常識科」を中心にその教育目標と内容を明らかにする。常識科はもともと1996年に「社会科、科学科、健康教育科」という三つの科目を統合した領域である。当時は常識科をコアカリキュラムとして位置づけられていた。その目的としては、教科知識の重複を避けて、現実社会と生活の中での学習を重視し、課題を解決する能力を高めて、学習に興味関心を持たせることである。筆者が常識科に注目する理由としては、2000年代以後の教育改革の中では、常識科のコアカリキュラムの位置づけが変わらないからである。この統合された領域の中で、校本課程開発が活発に行われている。2002年に『小学校常識科課程ガイドライン』（小1から小6まで）（2004年実施）（2011年改訂）という公文書の中で、常識科の教育理念、教育目標、学習内容、教育方法、評価、資源などに関する大綱が公布された。また、効果がある学習内容、教育方法、及び評価などの例が示されている。特に、学校が自ら児童生徒のニーズ、学校の強みを分析し、ガイドラインの枠組みに基づき、積極的に校本課程開発を行うことが提唱されている⁽²⁸⁾。

香港は帰還後、教科の壁を打破し、校本課程開発を促進するために八つの領域を設けた。その意図は広領域カリキュラムを実施することによって、校本課程開発と領域横断する教育活動を促すためである。ここでは、常識科が香港の全体カリキュラム構造の中での位置づけを図1で示している。縦の軸は八つの領域：中国語、英語、数学、科学、科学技術、個人社会と人文、芸術、体育教育である。香港では各領域の中で、あるいは領域横断の形での校本課程開発を促進している。常識科はその中の三つの領域（科学、科学技術、個人社会と人文教育）を統合したカリキュラムである。常識科は小学校の全体授業時数の12%～15%を占める。具体的な内容は健康と生活、人間と環境、日常生活の科学と科学技術、社会と公民、ナショナル・アイデンティティと中国文化、世界とIT社会が含まれて、六つの学習内容から編成されている⁽²⁹⁾。特に、獲得した知識を再構成し、各領域を貫通する九つの共通な資質・能力（1.協同性、2.コミュニケーション能力、3.創造力、4.批判的思考能力、5.情報技術の応用能力、6.運算能力、7.問

題解決能力, 8.自己管理能力, 9.主体的に学習し, 探究する能力) と正しい態度と価値観 (責任観, 他人を尊重する, 強さ, ナショナル・アイデンティティ, 思いやりと愛, 誠実さ, 使命感など) を育成することを目指している。各学校はこれらの共通な資質・能力を自由に学習内容と教材を精選することができる。教育局は取り組む学習内容, 単元名, 授業用の資料, テーマを示している⁽³⁰⁾。

そして, 図1のように, 教育局は五つの重要な学習経験 (道徳と公民, 知能発達, 社会サービス, 体育と芸術, キャリアと関連がある経験) を明記し, 各学校が多様な学習経験を提供するように促している。また, すべての領域の中で, 「四つの重要な教育項目」を組み込むようという政策が制定された。常識科のガイドラインの中でも, ①徳育及び公民教育 (徳育及公民教育), ②読書から学習 (従閱讀中学習), ③探究力を重視する課題解決学習 (專題研習, PBL= Problem based learning), ④ITを活用する学習という四つの重要な教育項目が強調され, 各学校は積極的にそれらの教育活動を教育内容の中に組み込むように取り組んでいる⁽³¹⁾。ここで注意するのは, 五つの重要な学習経験と四つの重要な教育項目が常識科だけではなく, 八つの領域の教育内容の中でも取り組む経験と教育活動である。常識科のガイドラインの中で, 具体的にどのように資質・能力を育て, 価値観と態度を養うかについて先進事例を紹介している⁽³³⁾。



図1. 香港の小学校カリキュラムの全体構造⁽³²⁾

このように, 香港の小学校の常識科は, 校本課程開発という学校文化の発展を促進し, 個人社会と人文教育, 科学教育, 科学技術教育の三つの学習領域に関わる知識, 能力, 価値観と態度を総合に育む領域である。児童生徒のニーズ, 興味関心に基づき, 自ら学び, 問題解決能力, 探究力, 創造力を育むことを中心としている。常識科のカリキュラムの縦と横の発展を遂げるために, 他の教科, 領域と学習経験の連動を目指している⁽³⁴⁾。ここでの縦と横の発展とは, 小学校と中学校の知識と経験の系統性と他の教科領域との横断を指している。常識科で資質・能力, 価値観と態度を育むためには, 学校の資源と強みを利用し, 教師の専門性発展を図り, その専門的な知識と能力を生かして, 学習内容を編成し, 教育方法と学習の方策, 評価の方法を工夫する必要があると述べられている⁽³⁵⁾。

常識科の目標は「①児童生徒に学習経験を提供し, 自分自身と社会, 世界に対する認識を深める。②児童生徒の学習意欲, 各種資質・能力を高め, 科学, 科学技術, 及び社会に関わる課題と時事を探究する。③児童生徒の正しい態度と価値観を育成し, よりよい人生と集団生活を送る。」と示された。例えば, 多様な学習経験を提供するために, 「実生活の学習経験が児童生徒に有効な学習を促すことができ, 児童生徒が教室の外で学習することが重要である。また, 教師が学習内容と資源を活用し, 新しい教育方法を用いて, 児童生徒のコミュニケーションとディベートを通じて, 知識の再構成を目指す。さらに, 就学前と小中学校との連続性を強めて, 科学と科学技術に対する興味関心を

高める。児童生徒の情意的な側面の発展を目指す」としている⁽³⁶⁾。

日本では、小野里はTIMSSとPISAの調査結果を分析し、香港の義務教育段階の子どもの科学に関する平均的な学力は世界の上位にあり、また上昇傾向が見られると述べ、科学の学習を通じて生涯学習者を育成する制度と指導事例を考察し、日本の理科教育と英語教育に示唆を与えた⁽³⁷⁾。自然、科学と科学技術に興味と好奇心を育てる科学教育を重視する方針は現在の『小学校常識科課程ガイドライン』の中でも明確に示された⁽³⁸⁾。山田も、香港では、中央課程をもとに、学校独自の学校裁量課程を作成することが一般的であり、科学教育を重視して、成果として数学オリンピック、物理オリンピックなどの国際コンクールで受賞した例を挙げた⁽³⁹⁾。野澤も、香港の小学校の天文科を重視する校本課程開発を校長の意思決定を中心に分析を行った⁽⁴⁰⁾。このように、香港では常識科で科学教育を重視している。

「小学校常識科課程ガイドライン」の中では、科学に関する校本課程開発の先進事例を挙げている。

- ・学校が多様な科学のテーマの「科学の日」を設けて、探究活動を推進し、児童生徒に多様な科学の学習経験を提供する。
- ・教師、保護者が指導者になったり、中学生を探究助手として招いたりすることができる。最後、意見を交換し、経験を共有する。
- ・一部の学校は児童生徒の能力と興味関心によってグループ分けして、近隣の中学校と一緒に「校本科学の日」を作る。
- ・一部の学校は科学キャンプを行い、児童生徒の創造力と思考力を育てて、大自然の中で探究活動を行う。特に、クラスメートと学年上の児童生徒と協同に課題解決に取り組むことによって、責任感と主体的な学習態度を養う。
- ・学校は大学が主催している「科学探究活動」に参加できる。小中学校と連携し、「科学テーマ探究学習の日」を設ける⁽⁴¹⁾。

常識科の学習の中で、教師は生活とかかわる多様な学習経験を提供し、児童生徒の探究する学習態度を養うことと学び方を学ぶことを重視している。教育局は関連機構と連携し、「常識科科学課題探求展覧会」を開催し、教師が児童生徒の探究活動を計画する際、その資料を活用するように推進している⁽⁴²⁾。また、インターネット上で「小科学者奨励計画」と「校本課程教授と学習資料庫」という二つの常識科に関する教育内容、方法、評価などの資料が公開されている⁽⁴³⁾。

4. 結論

「香港は10年も経たないうちに、中等学校でも小学校を卒業した生徒が活動的な学習を行うようになり、読解力の一連の国際比較においても、生徒の成績に改善が見られるようになった。例えば、国際教育到達度評価学会（IEA）の国際読解力調査（Progress in International Reading Literacy Study, PIRLS）では、香港の小学生の読解力の成績は国際ランキングで2001年の14位から2006年には2位となった⁽⁴⁴⁾。本論文はその好成績を挙げた一因を解明することを目指した。筆者は香港の校本課程開発のカリキュラム政策と支援制度を考察した後、特に、校本課程開発が活発に行われている常識科のカリキュラム全体構造の中での位置づけを分析し、その内容と実態を明らかにした。ここでは、香港の校本課程開発の特徴を三点にまとめ、それについて日本への示唆を含めながら言及したい。

第一に、本論文では、香港の教育局のカリキュラム改革の政策の中で、校本課程開発が始まった時期と目的を解明した。校本課程とは校長がリードし、学校側が社会の変化、実生活の必要性、及び児童生徒のニーズに応じて中央課程を調整して、カリキュラム開発を行うことを明らかにした。筆者は校本課程の概念を明らかにした上で、中央課程と校本課程をカリキュラムの内容、教育目標、カリキュラム観、教師観、児童生徒観、参加者、教材、適用範囲、弾力化、評価、説明責任の11項目に分けて比較を行い、中央課程と校本課程の特徴を整理した。さらに、教育課程発展協議会がカリキュラム改革の中の重点として、校本課程開発を試行期（2001年－2005年）、改善期（2006年－2010年）、発展期（2011年以後）に分けて、三つの発展時期と計画に沿って推進させたことを明らかにした。

現在、世界の多くの国が校本課程開発を重視する方針を取っている。教科の壁という縦割りが強い中央課程の問題点を解決するためには、学校にカリキュラム開発の裁量権を委譲し、教師に積極的にカリキュラム開発させることが重要である。本論文は中央課程と校本課程の相互補完の関係性を説いた。

第二に、香港教育局の校本課程開発の支援制度が校本課程開発の前進を後押しした。また、校本課程開発を支援する行政組織と制度が整備されることによって、校本課程開発の急速な進展を遂げた。校本課程開発の支援に当たる専

門部署が細分化され、「小学校校本課程発展組」と「中学校校本課程発展組」が設置され、学校現場への専門的な校本課程開発の指導と支援を提供している。現在、「大学-学校の連携計画」により校本課程開発の専門家の支援を受けた後、大学と学校の共同研究の形で継続的に校本課程開発に取り組む実践研究も多い。

また、各小学校では「課程統籌主任」という教育課程のリーダー職を設置し、各学習領域で校本課程の発展部会を設けて、全校の教師の参与を促すことになった。教育局は校長とミドルリーダーの専門性を高めるために、具体策として他の学校のカリキュラム開発の様子を把握する目的で、校長とミドルリーダーを他の学校の校外評価に参加させている。さらに、「校長支援ネットワーク」を立ち上げて新任校長が定年退職の校長とペアを組み、学校の行政管理の問題解決とカリキュラム開発に役立てている。このように、香港の教育局は「課程統籌主任」という教育課程のリーダー職を設置し、校長などのカリキュラムリーダーシップを発揮させて、専門性を高める充実した研修を通じて、校本課程開発を大いに推進した。

第三に、常識科では三つの領域（科学、科学技術、個人社会と人文）から統合されて、校本課程開発が活発に行われている。本論文では常識科の目標、内容、及びカリキュラム全体構造の位置づけを明らかにした。常識科は香港のカリキュラム改革の中でコアカリキュラムとして位置付けられ、その目的は多様な学習経験を提供し、児童生徒に有効な学習を促すことである。また、学習空間を広げ、教室の外で学習することが進められている。香港は2000年代のカリキュラム改革では教科の壁を打破し、校本課程開発を促進するために八つの領域を設けて、九つの共通な資質・能力と正しい価値観と態度を育成することを目的にしている。また、領域を統合して校本課程開発を行うことを促進しており、常識科はこのカリキュラム改革の目玉とも言える。

中央課程は硬直化になりがちなので、教育目標を達成するために、SBCDを通じて児童生徒のニーズを的確に把握し、学校の実情に沿ったカリキュラム開発を行うことが欠かせない。1974年に東京で開催されたOECD国際セミナーでのSBCDの提起から40年あまりが経った。現在、児童生徒が激変している社会にどう適応するかは喫緊の課題である。社会の価値観が変わり、教師に児童生徒のニーズに応じるカリキュラム開発が求められている。しかしながら、教師の多忙化によって多くの問題に十分には対応できない。したがって、香港のように国レベルのSBCD政策と支援制度が必要である。

【注】

- (1) 中国本土と香港特別行政区（本文では「香港」と略記）では「SBCD」のことを「校本課程開発」と訳す。その概念の発展と実践に関しては、田中統治 趙炳輝 野澤有希（翻訳）「中国における『校本課程開発』概念の発展と実践」『教育学系論集』第36巻、筑波大学人間系教育学域、2012年、55-65頁を参照されたい。
- (2) 香港教育課程發展議會『小学常識科課程ガイドライン』2011年、9頁。常識科のねらいは、科学と科学技術、自然、社会環境、健康的な生活に関する課題の探究心、知識、技能と態度を育てることである。
- (3) 文部科学省 http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index28.htm (2016/7/16最終確認)。OECDのPISAでの調査データによれば、2003年、2006年、2009年、2012年の「読解力」の順位は10位-3位-4位-2位で、「数学的リテラシー」の順位は1位-3位-3位-3位で、「科学的リテラシー」の順位は3位-2位-3位-2位であった。
- (4) 香港優質教育基金は1998年に政府から50億香港ドル（約6.45億ドル）の補助金で設立された。2009年6月に教育局の報告によると、その後も36.2億香港ドル（約4.67億ドル）の補助金が投入され、学校の7400の教育計画を補助した。顔明仁『戦後香港教育』教育リーダーと変革シリーズ、Division出版、2010年、55、272頁。
- (5) 同上書、274頁。
- (6) 日本では国レベルの公文書などで用いられている「教育課程」と三つのレベルをもつ「カリキュラム」という用語がある。香港では「教育課程」だけが用いられる。本論では、日本の先行研究を挙げて考察する場合には、カリキュラム開発という専門用語も用いる。文部省『カリキュラム開発の課題（カリキュラム開発に関する国際セミナー報告書）』、1975年、15-27頁。
- (7) 顔明仁 李子健「多元視角から97年帰還後の香港のカリキュラム改革」『香港教師中心学報』第7号、香港教師センター、2008年、1-13頁。
- (8) 香港教育課程發展議會『基礎教育課程ガイドライン-各尽所能・發揮所長』2002年、20頁。八つの領域に関する内容は図1を参照されたい。
- (9) 同上基礎教育課程ガイドライン、62頁。
- (10) 香港教育局「校本支援服務（2013/2014年）小学校、中学校および特殊教育」教育局通函（第33/2013号）2013年4月9日。教育局の質素保証および校本支援部の小学校校本課程開発と支援は上述の全ての学習領域が含まれている。
- (11) 柴田義松『教育課程-カリキュラム入門』有斐閣、2000年、9頁。
- (12) 前掲基礎教育課程ガイドライン、13頁、63頁。

- (13) 前掲基礎教育課程ガイドライン, 62頁。
- (14) 冯施钰珩編「香港の校本課程設計」『課程理論と設計』香港保良局教育検討会, 1994年, 137-141頁。
- (15) 同上書, 137-141頁。
- (16) 陳美如 郭昭如『学校本位課程評価－理念と実践反省』台湾五南図書出版社, 2003年, 41頁。
- (17) 前掲基礎教育課程ガイドライン, 63-64頁。
- (18) 教育局校本支援処小学校校本課程發展組
<http://www.edb.gov.hk/tc/edu-system/primary-secondary/applicable-to-primary-secondary/sbss/school-based-curriculum-primary/> (2016/07/15最終確認),
 教育局校本支援処中学校校本課程發展組
<http://www.edb.gov.hk/tc/edu-system/primary-secondary/applicable-to-primary-secondary/sbss/school-based-curriculum-secondary/contact-us.html> (2016/07/15最終確認)
- (19) <http://www.edb.gov.hk/sbss/sbcdp> (2016/07/15最終確認)。例えば, 教育局校本支援処小学校校本課程發展組は年間約200校への支援と指導を行っている(香港教育局のホームページに掲載している2012年小学校総数は569校)。
- (20) 李子健「香港学校効能と改善」『教育学報』第33号, 2005年, 1-23頁。
- (21) 香港教育局ホームページ
<http://www.edb.gov.hk/tc/curriculum-development/major-level-of-edu/primary/pscl/index.html> (2016/07/15最終確認)
- (22) 羅耀珍「香港小学校の課程リーダーの探究」羅耀珍 容萬城編2008『学校課程改革と教師専門性發展』港澳兒童教育国際協会, 2008年, 155頁。
- (23) 小島弘道『学校の改革過程における経営の構造と力(学校の自己革新と校長のリーダーシップに関する経営学的研究最終報告書)』筑波大学教育学系学校経営学研究室, 1998年, 53頁, 114頁。
- (24) 李子健「校本課程の課程開発: 成果・問題点と未来への展望」『兩岸三地学校本位課程發展學術検討会論文集』中華民国教材研究發展学会, 2001年, 223-230頁。
- (25) 李偉成「課程リーダーの任務と要求」李偉成 余慧明 許景輝『課程領導と学校發展』香港課程發展と領導学会 學術專業図書, 2008年, 27-40頁。
- (26) 陳健生 甘国臻 霍秉坤「教師レベルから課程の軟と硬政策を見る」朱嘉穎 張善培編『課程決定』香港中文大学教育学院, 2008年, 237頁。
- (27) 教育局校本専門支援組 校長支援ネットワーク <http://www.edb.gov.hk/tc/edu-system/primary-secondary/applicable-to-primary-secondary/sbss/sbps/principal-support-network-psn/> (2016/07/15最終確認)
- (28) 香港教育局小学校常識科に関するホームページ:
<http://www.edb.gov.hk/tc/curriculum-development/kla/general-studies-for-primary/index.html>
- (29) 前掲小学常識科課程ガイドライン, 12頁。
- (30) 教育課程發展議會「学習を学ぶ－教育課程發展方向」という報告書の中で, これから十年間香港の教育課程發展の方向性と教育方針を明示した。「九つの共通な資質・能力」(九種共通能力)と「四つのキー教育活動項目」(四つのキー教育活動項目)という重点的に教育する能力と項目を公布した。
 教育課程發展議會『学習を学ぶ－教育課程發展方向』報告書, 2001年, 18-25頁。
- (31) 同上報告書, 18-25頁。
- (32) 香港教育局ホームページ <http://www.edb.gov.hk> (2016/07/15最終確認) 香港のカリキュラム全体構造図により筆者が作成した。
- (33) 香港教育課程發展議會『小学常識科課程ガイドライン』2011年, 27-40頁。
- (34) 同上小学常識科課程ガイドライン, 3頁。
- (35) 同上小学常識科課程ガイドライン, 5頁。
- (36) 同上小学常識科課程ガイドライン, 71頁。
- (37) 小野里聡「香港の義務教育における科学的生涯学習者の育成と教授言語－日本の理科教育・英語教育への示唆」名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻『教育論叢』第52号, 2009年, 23-32頁。
- (38) 前掲小学常識科課程ガイドライン, 9頁。
- (39) 山田美香『香港・台湾の教育改革』風媒社, 2011年, 125頁。
- (40) 野澤有希「カリキュラム評価におけるCIPPモデルの文脈評価の意義に関する研究」上越教育大学研究紀要, 第35巻, 2016年。
- (41) 前掲小学常識科課程ガイドライン, 78頁。
- (42) 常識科科学課題探究展覧会
<http://www.hkedcity.net/article/project/pspe/archive.phtml> (2016/07/15最終確認)
- (43) 香港教育局「小科学者奨励計画」
<http://www.edb.gov.hk/index.aspx?langno=2&nodeID=4298> (2016/07/15最終確認)
 「校本課程教授と学習資料庫」の常識科ホームページ

<http://www.hkedcity.net/edb/teachingresources/project/?p=science> (2016/07/15最終確認)

(44) 経済協力開発機構 (OECD) 編著 渡辺良監訳 『PISAから見るできる国・頑張る国2』2012年, 明石書店。

付記：本稿はJSPS科学研究費補助金（若手研究（B）15K17340）の助成を受けたものである。

School-based curriculum development in Hong Kong Educational Reforms : Focusing on the contents of General Studies subject

Yuki NOZAWA*

ABSTRACT

Hong Kong students have been in the top three for all three subjects in PISA (Programme International Student Assessment) organized by the OECD (Organization of Economic and Cultural Development).

This research explored the various reasons for the success of Hong Kong educational systems. It focused on current curriculum reform, in particular school-based curriculum development and its policies, support measures of the Education Bureau, and curriculum contents. The focus of the analysis was the General Studies subject in primary schools, its learning contents, aims, and its role within the whole school curriculum. The aim was to clearly understand school-based curriculum development in Hong Kong.

The current school curriculum in Hong Kong has eight domains of learning experiences. The subject General Studies has three integrated domains, that form a new subject. The three domains are science, technology, and personal and social education. School-based approaches to developing a curriculum take place in all subjects, horizontally and vertically. This approach covers all individual subjects as well as learning experiences that integrate subject learning. Hong Kong schools not only develop subjects but also engage in the professional development of teachers, developing new contents, new educational methods, and a new school-based professional culture within schools. All these measures contribute to developing learning and professional cultures holistically in schools in Hong Kong.

* School Education